

場所 ねむの木寮

この会議は「地域連携推進会議」として開催され、障害者グループホーム「ねむの木寮」の運営状況や地域との連携について議論されました。安東（サービス管理責任者）が司会を務め、利用者代表、家族代表、地域自治会代表、福祉専門家が参加しました。

会議では、まず法人「青松の会」の沿革が説明され、1970 年から現在に至るまでの発展経緯が共有されました。次に知的障害についての基本的な理解を深めるためのレクチャーがあり、障害の特性や支援の在り方について説明がありました。

施設の運営状況については、利用者は平日に区内の通所施設（就労継続支援 B 型や生活介護）に通っていること、法人の経営状況は黒字であることが報告されました。また、災害時や感染症発生時の業務継続計画（BCP）についても説明があり、特に災害時は本体施設「おおぞら」との連携が重要であることが強調されました。

利用者の権利擁護に関しては、ヒヤリハット事例として、利用者が通所施設を休んだ際の対応の不備が報告され、改善策として対応マニュアルを作成したことが共有されました。

第三者評価の結果では、マニュアルの浸透やケース検討による支援の深化、地域連携の強化、利用者の高齢化・重度化への対応が課題として挙げられました。

長友氏（福祉専門家）からは、障害者福祉の歴史的背景や地域共生の重要性について解説があり、地域の中で障害者が共に暮らすという考え方の重要性が強調されました。Y 氏（自治会代表）からは、地域活動への参加の可能性について提案があり、クリーン作戦や防災訓練などへの参加を通じた交流の機会が検討されました。

会議全体を通して、グループホームと地域との連携強化、利用者の高齢化への対応、日常的な交流の促進などが今後の課題として浮かび上がりました。

会議の開始と参加者紹介

安東（サービス管理責任者）が会議を開始し、地域連携推進会議の目的を説明しました。この会議は国の指示により義務付けられており、地域の方々と専門家を交えて施設の運営について話し合う場であると説明されました。参加者として、利用者代表の T さん、利用者家族の I さんの母親、碑文谷自治会の Y 氏、福祉専門家の長友氏（副理事長・大学教授）が紹介されました。

法人の沿革説明

特定非営利活動法人「青松の会」の沿革について説明しました。

1970年に中央区の知的障害者作業所を引き継ぎ、1979年に目黒区に移転、2003年に大円寺の厚意により目黒区中町に移転しました。2010年にNPO法人格を取得し、2012年に大山グループホームの運営を開始しましたが、その後中止しています。

2017年に目黒区立第六中学校跡地に新作業所を建設し移転、2019年に大岡山グループホームの運営を終了し他法人に引き継ぎました。2023年には通所困難者のための送迎サービスを開始し、2024年に障害者グループホーム「ねむの木寮」の運営を社会福祉法人「あかねの会」から引き継いで開始したとのことです。

知的障害についてのレクチャー

サービス管理責任者安東が知的障害について説明。

知的障害とは生まれつきまたは成長途中で理解力や判断力、日常生活を自分で行う力などがゆっくり育っていく状態であると説明しました。

特徴として、文字や数字の理解に時間がかかる、物事の手順を覚えるのが難しい、新しい環境に慣れるのに時間がかかる、自分の気持ちを言葉で伝えるのが難しいことなどが挙げられました。

しかし、ゆっくりでも確実に学び成長する力を持っていることも強調されました。例として、お小遣い帳をつける練習を通じて新しいスキルを身につけた利用者の例が紹介されました。

地域での生活と周囲の支援

知的障害者が地域で暮らす上で周囲の人にできることについては、別のグループホームでの利用者さんからの要望として「挨拶をしてほしい」という要望が紹介されました。また、分かりやすくゆっくり話す、相手のペースに合わせる、否定せず話を聞く、困っていそうなら声をかける、偏見を持たずその人の得意なことを尊重するなど、具体的な関わり方が提案されました。Tさん(利用者)の趣味としてジャニーズが好きであることなども紹介され、それぞれの個性を尊重することの大切さが語られました。

近隣からの苦情等の共有

現在のところ近隣からの苦情は出ていないと報告しました。ただし、利用者が外出時に駅で一時的に迷子になりかけたことがあり、近隣の方が見かけて後で報告してくれたエピソードが紹介されました。利用者は穏やかに静かに暮らしており、ゴミ出しなどのルールもきちんと守っているため、特に問題は発生していないとのことでした。

利用者の日常生活の様子

利用者の日常生活について説明しました。平日は全員が区内の通所施設に通っており、就労継続支援B型や生活介護などのサービスを利用しています。具体的な施設として、おおぞら、下目黒福祉工房、目

黒本町福祉工房、かみよん工房などが挙げられました。Tさん(利用者)も自分の通所先での活動について、縫い物や刺繍の仕事をしていると説明しました。各施設での活動内容や、パンやシフォンケーキ、クッキーなどの製品販売についても触れられました。

経営状況の報告とBCP

法人の経営状況について、グループホームの収入があることで法人本体も黒字で運営できていると報告しました。

グループホームは1人でも空きが出ると赤字になりやすい事業であるため、定員を確保することの重要性が強調されました。

また、業務継続計画(BCP)については、自然災害発生時と感染症発生時の2つの計画が策定されていることが説明されました。災害時には本体施設「おおぞら」との連携が重要であり、備蓄も主に本体施設にあるとのことでした。感染症対策としては、部屋の使い分けや消毒の徹底などの対応が説明されました。

利用者の権利擁護

ヒヤリハット事例として、9月1日に利用者が通所施設を休んだ際、日中の支援員を配置しなかったことが報告されました。この問題に対応するため、通所施設を休む際の対応マニュアルを作成し、職員に周知したとのことでした。

また、第三者評価の結果についても報告があり、マニュアルの浸透とケース検討による支援の深化、地域連携推進会議の開催と避難訓練の実施、利用者の高齢化・重度化への対応などが課題として挙げられました。特に利用者の高齢化については、将来的にグループホームでの生活が難しくなった場合の対応が課題となっていることが説明されました。

長友氏による地域共生の解説

長友氏(福祉専門家)は、障害者福祉の歴史的背景と地域共生の重要性について解説しました。かつては障害者は施設に隔離されるような状況だったが、2000年頃から地域の中で共に暮らすという考え方に変わってきたと説明しました。グループホームはその流れの中で生まれたもので、地域住民の一人として障害者も共に暮らすという考え方が重要であると強調しました。地域の人々に障害者を理解してもらうためには、挨拶から始まる日常的な交流が大切であり、地域連携推進会議もその一環であると説明されました。

地域との交流の可能性

Y氏(碑文谷自治会)は、グループホームとの連携について、どのような交流ができるか模索していると述べました。自治会では日大水泳部や保育園などとも連携を取っており、例えばクリーン作戦などの活動に

一緒に参加してもらっていると説明しました。グループホームの利用者とも同様の交流ができないか提案し、12月7日に予定されているクリーン作戦への参加を呼びかけました。また、3月に予定されている防災イベントについても紹介し、ホーム側も参加の方向で調整することとなりました。

自治会のクリーン作戦や防災訓練、お祭りなどの行事に参加することで交流を深める可能性が話され、寮としては利用者が支援者と一緒に参加できる可能性を示し、特にクリーン作戦への参加に前向きな姿勢を示しました。

また、利用者は普段から地域のお祭りなどに個人として参加していることも紹介され、知的障害者は外見からは分かりにくいいため、普通に社会に溶け込んで生活していることが説明されました。災害時などお互いに助け合える関係を構築するためにも、日常的な交流の重要性が確認されました。

行動項目

- ① 自治会のクリーン作戦(12月7日)に利用者と職員が参加する方向で調整することを提案した。
- ② 山下氏より3月に予定されている防災イベントについて情報を共有し、グループホームの参加を呼びかけた。
- ③ 自治会の活動(クリーン作戦や防災訓練)になるべく参加するよう努めることを約束した。
- ④ 自治会や住民会議の活動にグループホームの存在を知らせ、参加の機会を作ることを提案した。
グループホームの備蓄品(特に食料品や日用品)を少しずつ揃えていく予定であることを報告した。